

池田龍雄の発言

はじめに 6

第一章 詩的文章

洞窟（アフガニスタン） 10

空 11

芸術燃えよ、戦火は消えろ 12

十六歳、未遂の遺書 13

友に捧ぐ——『SETONAIKAI 13th MAY 1991』 15

宙吊り 16

僕らを傷つけたもの 17

飛翔する意志 18

夜 19

福島から広がる 20

第二章 社会批評

「聖戦」の論理——負けるが官軍	24
勝ち負けについて	34
ゲーム感覚	37
蝸牛角上、何事か争う	41
「愛国心」とは	45
何のために……	50
千羽鶴と黄色いハンカチ	57
いのちの重さ	62
考える葺	69
戦争と美術	74
展覧会は画家たちのデモ	79
「玉碎」の美学——散りそこなった桜	83
いたずらに「時」を去らせず、こころして「死」を無にせず	92
心は剣によつては滅ぼされない	97
個人の魂と集団の魂	99

それでも地球は回っている	101
歴史はフィクションか	104
グロテスクな果ての滑稽	110
参議院選とマスメディア	113
油の話	117
「腐った脳味噌」と『壁あつき部屋』	121
自主規制について	126
岡本太郎について	129
靖国の闇を見る	141
戦争とわたし	148
開戦の詔勅	157
3・11以後、今、われわれに何ができるか	160
わたしにとつての五〇年代美術	162
冒されないアートを	170
集えば力	173
守り抜こう九条と表現の自由	175

第三章 発話

アンデパンダン展とパフォーマンス 178

第四章 社会と絵画

池田龍雄のペン画作品（一九五〇～六〇年代） 204

闘士、池田龍雄 宮田徹也 224

初出一覧 233

はじめに

画家も生活している。普通の人にとっての生活は、たいていは当の「生活」に必要なお金を稼ぐ「仕事」だが、画家など表現者の「仕事」は、必ずしも金銭を稼ぐためではなく、心の純粋な欲求によるものである。

だから画家の仕事は、そして、生み出された作品は、売るためにつくられたものではなく、発表するためにつくられたもの、と言うべきだろう。そもそも私は、あの第二次世界大戦に、お国のためだとそのかされて、海軍の飛行兵となり、終戦間際には特攻隊にさせられ、死ぬ一歩手前で命拾いした身だった。しかも、それがけしからんことだと、自分で選んで入った師範学校を追放されたから、ならば自由に生きてゆこう、という覚悟で、絵の道に飛び込んだので、反権力・反戦の思いは人一倍強い。

また、一方では、画家として、芸術に関する文章もたくさん手がけた。それらはすでに六冊の書籍に収めたが、ここにはその六冊の中には載せなかったものを集めた。集めた文のほとんどは、一緒に反戦運動をやっている船田功氏ふなだいさおが出しているミニコミ紙『新聞0（ゼロ）』に、わたしが寄せたものである。

そのほか、ちょうど一年前に横浜開港アンデパンダン展で、わたしの一九五〇年代のペン画作品と最新作を展示し映画も上映して、アンデパンダン展の今昔を語る懇話会が開かれた。そのときのわたしの発言も掲載することになった。

そもそもこの本の企画は、わたしの古くからの友人、志賀信夫氏である。私は彼に編集の仕事を含めて、一切を任せた。本書が完成に至るまでに、美術監督の星埜^{ほしの}恵子さん、美術研究の宮田徹也さんに、多大なるご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

二〇一八年四月

池田龍雄

第一章
詩的文章

洞窟（アフガニスタン）

君の眼は

何を見つめているのか

火もなく水もない

暗黒の中で

君の魂は

何に燃えているのか

凍てついた

底知れぬ

迷宮の奥で

闘う人々よ

空

空は裂け大地が燃えている

聞こえるのは軍靴の響き

それは遠い昔のことだったろうか

それとも近い未来のことだろうか

そこで眼をつぶってはならない

そこで耳をふさいではならない

眼をひらいて青空をみつめよう

声を揃えて軍靴の響きを打消そう

芸術燃えよ、戦火は消えろ

戦争は暴力である。あらゆる生命を殺し、魂を奪い

精神を壊し、心を狂わす。芸術は魂から生まれ、精神が育て、
そして心を養う。心のゆとり、あそび心を。

故に戦争は文化・芸術の敵である。

戦争によって芸術はゆがめられ、圧殺される。

過去に体験したあの戦争がそのことを歴然と証明してくれた。

にもかかわらずどこかでだれかが戦争を引き起こし、戦火が絶えない。

地球グローブは今や小さくなった。

イラクの戦火も決して遠くはないのだ。

だから反対しよう。反対し続けよう。

この地上から戦火の消えるまで。

代わりに、生命の炎である芸術を華々しく燃えさせたせうではないか。

〈プロフィール〉

池田龍雄（いけだ・たつお）

1928（昭和3）年8月15日、佐賀県生まれ。画家。1943年に海軍航空隊に入隊、45年4月、特攻隊員となり霞ヶ浦航空隊で終戦。佐賀師範学校に編入されるが占領政策で退学。48年、多摩造形芸術専門学校（多摩美術大学）入学。岡本太郎、花田清輝、安部公房、埴谷雄高らの「夜の会」「アヴァンギャルド芸術研究会」「世紀の会」に参加。1954年、『網元』が安部公房により紹介され注目を浴びる。数多くの作品と美術や社会についての文章を発表。2010～11年「池田龍雄 アヴァンギャルドの軌跡」展（山梨県立美術館、川崎市岡本太郎美術館、福岡県立美術館）、2018年「池田龍雄展——楯円幻想」練馬区立美術館など個展多数。著書『夢・現・記—画家の時代への証言』『蜻蛉の夢—記憶・回想そして絵画』『芸術アヴァンギャルドの背中』『池田龍雄画集』『視覚の外縁—池田龍雄文集拾遺』『池田龍雄—アヴァンギャルドの軌跡』。絵本：挿絵『ないた あかおに』（浜田廣介）『デブの国ノッポの国』（アンドレ・モーロワ）『星のカンタータ』（三木卓）など。

池田龍雄の発言 絵画のうしろにあるもの

2018年5月15日 初版第1刷印刷

2018年5月25日 初版第1刷発行

著者 池田龍雄

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル2F

TEL: 03-3264-5254 FAX: 03-3264-5232 振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷

組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1724-8 © Tatsuo Ikeda 2018, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。